☆大学改革委（準）案弾劾！
☆大学の帝国主義的再編阻止！
☆中教審答申実力粉砕！
☆労学共闘強化！

進撃

4月22日（火曜）
第9号　一部　20円
東大闘争全学共闘会議
事務局編集委員会発行
連絡先　東京都文京区本郷7の3の1　東大解放講堂気付
振替東京・75191
（臨時）千代田区神田局区内　中大学館気付

☆加藤体制打倒、革命的七項目全面貫徹！
☆授業強行実力阻止！
☆全学バリケード封鎖貫徹！
☆全国学園占拠闘争貫徹！

4・28安保・沖縄闘争に起て　加藤シンポを弾劾追及集会に

四月十三日から十五日まで、連日百名以上の結集をもって全学闘争連合の理論合宿が行なわれ、東大闘争の中間総括と今後の方針と展望についての熱っぽい討論が交わされ、当面、次のスローガンが確認された。

確認されたスローガン
一、東大解体！
一、教育の帝国主義的再編粉砕！
一、講座制解体＝教授会解体！
一、身分制度撤廃＝助手・院生・学位制度撤廃！
一、近代化路線＝加藤体制打倒！
八十四委員会撤廃！
「十項目確認」撤回！
一、沖縄・安保闘争勝利！

確認された新たな要求
一、一切の処分制度を撤回せよ
一、警察導入、夜間構内パトロール、捜査協力を自己批判し、拒否せよ

現在の東大闘争は全社会的なブルジョア秩序総体に対する反乱の一部として闘われているのであり、まさに七〇年闘争の一部に他ならない。七〇年安保闘争は条約反対闘争や単なる中央対政府闘争でもなく、一切の場所における反体制反権力闘争である。

われわれは一八・一九闘争で入試強行を粉砕することによって、"東大解体"へ向けての闘争の永続化の展望を切り拓いた。

入試中止は結果ではなく、我々が作り出した状況そのものである。実際には大学の中に四年以上の矛盾のクサビを打ち込んだのである。今こそ長期的東大闘争のイメージを考えなければならない。

学内的には改革委（準）による第二の国大協自主規制路線が準備されている。改革委（準）は加藤近代化路線をち密化し、具体的に実践する方策を既に「覚書」として第八分まで報告し、今や全国大学の新たなる帝国主義的大学管理案を指し示すものとなっている。こうした一切の策動は「中教審答申」を最大限のマスターバーとして利用しつつ貫徹されている。

一八・一九の闘いを通して東大闘争は全国労・学との連帯を積極的に推し進める中で、その質を高め、拡大された闘争の展望を創出し得る。したがって、階級激動をわれわれの闘争の中に組み入れてゆかなければならない。

ということは、とりもなおさず、東大闘争は、この階級的激動を形成する一翼であるということを示している。この事実が東大全共闘に結集するすべての学友に鮮明に意識されねば、東大全共闘の闘争主体としてさらなる前進は展望し得ないであろう。今やおずおずと闘いのなかで、自から立たされた地平が"政治的"であると語るようなはにかみは捨てさるべき時である。況んや、東大闘争と沖縄・安保闘争とを対立させる"非政治主義"こそ東大闘争が結実させた原理的果実だなどという"悪い違い"においておやである。加藤近代化路線、大学の帝国主義的再編に対し、全面的に肉迫せんとすればするほど、われわれは益々七〇年代の階級激動の只中へと押しやられ、益々単なる"東大闘争"に限定され得ぬ闘争主体へと形成されざるを得ないのである。これは、一・一八、一九以後となった

今では、最早、東大闘争の[illegible]得ぬ宿命である。[illegible]政治課題としての[illegible]争に対し、東大闘争[illegible]主体の統一による[illegible]なければならない。さらにわれわれの[illegible]委（準）＝加藤近代[illegible]的に対決し、一八・[illegible]徹底的に追及し、近[illegible]に秘められた恐るべ[illegible]学生管理案を大衆的[illegible]ればならない。

現在われわれが当面している最大の困難は機動隊秩序による強圧的な闘争圧殺策動である。「自主改革」も権力の圧倒的暴力＝機動隊を背景として行われようとしている。少しでもわれわれが行動を起こせば直ちに機動隊が出動される。加藤の機動隊万能主義をいかに突破するか、この局面をいかに打開するかが当面の闘争課題である。そして何よりも教育の帝国主義的再編を粉砕する日常的実践の結集軸を設定してゆかなければならない。

収拾シンポジウムを粉砕し　大学闘争を再構築せよ

加藤執行部は四月新総長就任時の記者会見でほのめかした全学的シンポジウムを着々と計画し、実行に移さんとしている。これは全共闘圧殺の上に進行しつつある正常化、授業の全面再開を最終的に保障するものとして行わんとすることは明白である。全共闘の提起した問題は正しい面を含んでいるが大学はあくまでも理性が貫徹されねばならぬ場として、話し合いを提起するという姿勢に、これまでの一切の偽瞞的対等性が権力の存在を隠蔽しつつ集約的に表現されている。二十二日[illegible]かれる当局主催の[illegible]「体制と学問」「人間」なるシンポは、この加藤の目論む[illegible]の一環としてあることを明確にとらえねばならない。[illegible]授業再開するかの[illegible]文化人講演なみのシ[illegible]に一切無縁であり粉[illegible]の何物でもない。

我々全共闘はかか[illegible]の欺瞞的連続シンポ[illegible]徹底的に粉砕し、近[illegible]とに冷厳に貫徹されぬ非人間性の[illegible]を徹底的に暴き出さねばならない。

五月上旬に予定された加藤連続シンポを粉砕し全共闘による追及糾弾集会にせよ。各学部等で行なわれる学部教授追及を加藤体制打倒に向けて集約せよ。

我々はこの加藤追及集会において、一月以来の機動隊導入、官憲の夜間駐留、執拗に行われている捜査協力の徹底した自己批判をせまり、さらに全学生の参加の名のもとに闘う部分をパージする近代化処分制度を粉砕し、一切の不当処分を廃止させねばならぬ。そしてこの追及による執行部の近代化路線、教育の帝国主義的再編の中心環をなす加藤体制打倒に向け、我々の闘いを再編強化し、五月下旬における全共闘の拠点の創出、卒業試験粉砕の実力闘争を準備しなければならない。

「進歩的知識人」を告発
新聞研究所封鎖に起つ

新聞研究生スト実委は、大学当局、右翼、民青一体化した正常化策動、そして官憲による戒厳体制―と、闘争圧殺のファッショが荒れくるう本郷キャンパスにあって、三月二十六日、断固として新聞研究所所長室占拠闘争を貫徹、東大解体の闘いの巨大な一歩を進めた。

同スト実委は、昨年六月二十八日以来一貫して無期限ストを行ち抜き、全共闘運動を先進的に担ってきたが、さる一月十八、十九日の機動隊八五〇〇による解放講堂総攻撃以来権威をふるう闘争圧殺の嵐のなかで、同研究所の田村紀雄助手が出版したデッチ上げ文書「東大紛争の記録」をめぐり、同助手はじめ、同研究所所員会メンバー全員にたいして「学問、研究の自由の名を借りて、闘争の商品化、売名行為、反人民的裏切りに終始する」その腐敗し切った本質を徹底的に追及し暴露することをテコに、スト実戦線の思想的、行動的再構築、拡大強化を勝ち取っていった。そして三月二十六日、所員会が欺瞞的体制内包摂をねらって設定した「所長選挙方法を話し合う同研究所全所員集会」に介入粉砕したうえ①同所員会の十項目確認書批准即時撤回②所長選挙、研究生入試中止③一八、一九をはじめ、この間の同所員会の行動を全面的に自己批判せよ―のスローガンのもと、所長室占拠を決行し、自主管理にはいった。

これにより、自らの反人民的、階級的存在を認識せず「歴史の審判者」を僭称し、闘争に敵対するT助教授、"戦後民主主義"の成果の上に立ち、話し合いによる解決を云々しながらわれわれの行動に対して「いいがかりだ」と居直り、その後、われわれに対して追従笑いをもってしか対応し得ぬT助教授など、いわゆる進歩的知識人を自称する同研究所所員会の某集団的本質が白日のもとに暴露された。同スト実委は、この成果にふまえ、さらに戦列を強化して新研所員会解体、加藤近代化による東大の帝国主義的再編粉砕の東大解体の闘いを、全共闘に結集する総ての戦闘的な学生、院生、教職員と連帯して闘い抜く決意にもえている。

過ぐる一年の東大闘争の、厳しい闘いの炎の中から、自からを闘う戦士として鍛え上げてきた全ての学友諸君に訴える。

東大闘争は、教育の帝国主義的再編という、日帝の攻撃を、一・一八、一九の闘いの高みにおいてはねつけつつ永続闘争の展望を切拓いてきた。これは日帝との個別領域におけるラジカルな闘いの局面であった。そして今再び我々は、そこでの我々の闘う主体の形成がいかなるものであったかの全面的自己検証を迫られる闘いの地平に立たされている。

四・二八沖縄デーを突破口として闘われる七〇年代反安保・沖縄闘争がそれである。ヴェトナム、ドル危機に象徴され、ニクソン新政権の新たな世界支配戦略による世界支配の再編過程に一層の加担を強めつつ日帝の目論む、独自のアジア支配勢力としての登場と、それを支える新たなる日米軍事同盟の日本の再編は、極東の「要石」沖縄の日本への返還をその実体的基礎とする。七〇年安保自動延長策動として、日米安保体制の「核安保化」の構想として着々と進行しつつある。更に、戦後二四年間の米軍政下、全島基地化の中に呻吟している沖縄人民の過渡的要求としての平和憲法下の本土復帰をかかげ、核兵器、B52、基地撤去を求めての闘いは、七〇年「安保体制の再編強化の過程の内に、ものの見事に裏切られんとしているのだ。

我々は、七〇年安保粉砕の闘いを断固として勝利する闘いとして展開するなかで、沖縄人民との革命的連帯を勝ち取りつつ闘って行かなくてはならない。

いかなる重大な闘いの展開の時に立ち遅れている。我々は全ての闘う学友諸君に対して、全闘連沖縄・安保闘争実行委員会の提起にふまえ、各学部、系、クラスにまで至る断固としてこの闘いを担う中核部隊の組織化と、広範な討論の展開を呼びかける。

個別東大における更に強まる加藤近代化路線との熾烈な闘いを、切拓くなかから、反安保・沖縄闘争へと戦線を拡大し、全東大の闘うエネルギーの総結集へむけ、破竹の進撃を開始せよ！

闘いは今から！四・二三各学部徹夜討論集会を組織せよ！この成果を四・二五全学討論集会へ圧倒的に結集せよ！

4・28大合流で新たな展望を！
日大全学共闘会議アピール

一・一八、一九の東大闘争の革命的爆発の前に、学生反乱の強大さにおびえ切った、日本帝国主義者は、「秩序の回復」の名目でもって、機動隊の暴力を唯一の手段としつつ、全ての大学闘争の圧殺をはかるという最悪の政策にふみ込んできている。この機動隊戒厳令下において、我々の闘いも一定程度の困難に直面している。

しかしながら、いかに官憲がその暴力によってわれわれを弾圧しようとも、我々の闘いはそれに屈するどころか、逆にそれに倍する力をもって敵権力に報復するであろう。

なぜならば、我々が永年の怒りをこめて提起した要求は、何一つ解決されないばかりか、権力は益々狂暴な弾圧に荒れ狂っているからであり、現在の情勢の中で、全国大学闘争と一体化しつつ、安保闘争の前衛戦を形成しており、大学を場として国家の総体と対決するという高みにまで登りつめ、我々の闘いは巨大な内容にまで発展しているからである。

しかしながら、我々に対する敵攻撃が、帝国主義権力の総力を挙げてかけられてきたものであるとすれば、我々の勝利は全人民の蜂起をもってしか展望できないという局面は、もはや誰の目にも明らかであろう。

大学闘争と沖縄・安保闘争の大合流を自らの思想と肉体をもって一致させ、4・28沖縄、安保闘争を史上空前の規模と壮烈さで闘い抜いてこそ、真の我々の希望は切開かれるであろう。

戦後世界体制の崩壊的危機は、これまで万全であるかに見えた沖縄支配にも重大な危機を生み出している。B52撤去闘争に立上った沖縄人民の闘いは、米兵のカービン銃の恫喝にも屈しないものと成長している。日米安保同盟堅持強化を基本線として延命して来た日本帝国主義は、安保同盟のカナメ石において、米軍政支配の動揺を必死になって補強しつつも、ますます深い混乱に陥って行かざるを得ない。

我々は4・28への大合流の中から、機動隊万能の構造を粉砕し古田体打倒、日帝打倒の大衆的武装闘争を徹底して押しすすめて行くであろう。

東大の学友諸君！我が日大の学友と共に4・28沖縄闘争に最大限決起し、強固とした闘争体制を構築しようではないか！

粉砕カリキュラムを全学化せよ
"正常化"は日々破綻している

全共闘カリキュラム委員会は、一・一八、一九の大弾圧以来、加藤執行部がその全生命をかけて推進せんとしている正常化"改革"の内実を徹底的にあばくべく、粉砕カリキュラムを組み、そして今や大衆的規模で、その全学化をかちとりつつある。

"正常化"は、単なる旧態依然の日常性への復帰を意味するものではない。それは加藤執行部が、"紛争の苦い経験"をふまえつつ大学を、より効率的な管理の徹底する組織と再編し、その中で自主規制的に大学の帝国主義的再編を貫徹してゆく、そういった内実を有するものであり、日々行なわれている授業、その焦点たる試験が、その様な"正常化"策動を実質的に保証しているのだ。我々が加藤"近代化"路線を明確に闘争の客体として問題にし得る為にはかかる正常化―授業再開の内実を、大衆的に告発しつつこれを粉砕してゆくのでなければならない。

我々は当初、正常化―授業再開の意味を、明確にとらえきる事が出来なかった為に、粉砕カリキュラム闘争が部分的なものにならざるをえなかった事を、否定的に総括しなければならない。然しその不充分な闘争の中でも我々は焦点に集中し、二ケ月の間"貫"してこの授業を討論の場に変えた。

先ずは法学部の必修授業―田中英米法、団藤刑訴法に我々の鋭い告発の刃をつきつける事を開始したのである。

また一方駒場でも三月二十四日授業再開が民青＝右翼ブロックに守られた教授会によって決定されたが、ほとんど全ての語学授業、体育実技を粉砕しその場を討論集会に切り換え、共闘会議の更なる組織化が追求されている。

我々の問いかけに対し、教官も秩序派諸君も、居直り以外には自らの立場を"論理づける"事は成し得ず、"居直る事の許されない"民青系諸君に至っては、もはや何の論理も持ちえぬまま我々に暴力的に対処して来る、秩序維持暴力集団としての本質を暴露せざるを得ないという状況を呈しているのである。

我々は、正常化によって重く我々の上にのしかかって来ている東大闘争の現局面を担いきるのでなければ、沖縄・安保闘争を、まさに東大闘争によって切開かれた地平に於て闘う事は出来ないであろう。今の局面をのりきる、正常化粉砕＝日々進行する授業自身に、我々の問いをぶつける事―如何に苦しく、消耗であろうとも、それをやりぬく事によって、切り開く事が出来るのである。

試験粉砕を射程内に把えつつ粉砕カリキュラムの全学化によって正常化―加藤新体制を打破せよ!!

"希望"を裏切る現実に挑め！
―全国の新入生諸君へ―
東大全共闘代表　山本義隆

裏切られることの予感を影として伴う何かしら空漠たる期待をもって入学した全国の新入生諸君に東大全共闘より訴える。

東大闘争を二年有余に亘って闘ってきた我々は、自らの闘いを通じて現存する「学問」や「大学」を問い、あるいは告発し、かくしてそれらをも組み込んで成立している現体制の秩序、そして国家との闘いを挑んでいる。今、この闘争の全重量を賭して、否、我々自身の存在の根拠を賭して諸君ら新入生に自問をせまりたい。「大学とは」「教育とは」「学問とは」「連帯とは」…と。

勿論、多くの諸君は高校時代、そのような問を反芻し続けてきたことであろう。しかも現実は全て否定的であった。「連帯」に代るに「戦争」が、「学問」に代るに「処世術」が、「教育」に代るに「主義」があった。それは今やうそ寒い記憶でしかないかもしれない。大学がそれらを帳消しにすると無理にでも自らに強いたかもしれない。

だが、小学校以来高校までの教育、決して人間性の開示を意味しない「人造り」と位置付けられ、国家が完全に掌握した教育は、高校で閉じるのではなく、今や大学で最終的に貫徹されているのだ。

現在の全国学園闘争は、かかる現実を強要する国家権力との闘争としてあるのだということをまずもって認識してもらいたい。五〇年代にほぼ完了した初中等教育の体制への包摂（勤評、教科書検定道徳教育、等々）の後をうけ、高度成長後期より大学の改編が始った。日韓条約を足場に再度東南アジア侵略を始めている日本帝国主義は、熾烈な列強間の市場競争に打克つべく、国内体制の全面的再編を行いつつある。労働者に対する合理化、独占の強化等々。大学の改編はその一環としてある。現在の産業構造の変化に見合った労働者教育をより能率的に行うべく大学の格差化目的大学化が近代化を伴いつつ進行し、同時に安保・沖縄闘争を控え日本の階級闘争の突出部を担っている学生への弾圧を強化するべく、管理体制の強化が行われんとしている。教育においては帝国主義イデオロギーの貫徹と体制に有用なる従順たる人間の養成が目的とされている。のみならず、大学の教授達は権力に徹底し屈服し、自ら学生を支配することにより、その特権的地位――知識の独占とそれによる社会的経済的地位――を守ろうとしている。このような現実に対する反乱が他ならない全国で爆発している学園闘争である。教授達は処分や警察や機動隊といった暴力で我々を圧殺しようとしているのだ。

従って学生の反乱は単なる大学の改良や物取闘争としてあるのではなく、大学に現象した社会的矛盾との闘争であり、必然的に全体制の変革をも志向するものである。実際全国学園闘争は、闘いを通して安保沖縄闘争の一翼を形成しつつ革命的農民や労働者との連帯を克取っている。来る四・二八の沖縄闘争はその巨大な第一歩として闘われんとしている。

全国の新入生諸君！現実をありのままに見つめ考えてもらいたい。自らが自らの主人公となり、闘う学生の隊列に連帯と真理を見出すのか、それとも権力に運命をあずけ、物言わぬ有能なる歯車となるのか、だが決断の時である。

希望を裏切るのは大学や教授達であり、そして何よりも自らの内に胚胎する。我々が血を流して突破りつつあるこの壁に共に挑まれんことを。東大全共闘は心から訴える。

全国の学園闘争に決起せよ！
四・二八闘争を突破口に決起せよ！

高圧タンク爆発を白い巨塔の解体へ！
単一青医連・各科医師連合準備会結成

四月十一日、高圧酸素室爆発事故の死者の初七日に当って、単一青医連、医共闘に結集した、学友・医師は、脳外科外来封鎖に決起した。

高圧タンクの爆発は、直接的には、「高圧酸素下の生体の変化」というトピックス研究のための危険な人体実験の途中に発生したものであったが、それは奇しくも、我々がきびしく批判し続けてきた「医局社会―学会」体制、その浅薄な業績至上主義、流行追従主義に起因している事を見なければならない。

一方東大病院全体が急速な営利化の中で、極端な人手不足に陥り業務が複雑になっていた事を確認せねばならない。東大病院の爆発は、病院近代化の最先端を行く脳外科と中央検査室の交叉する地点に発生したのは偶然と言えようか。

青医連・医共闘は「医局解体―各科医師連合結成」「学会体制粉砕」「医療の帝国主義的再編阻止―病院営利化反対」の方針が正しかった事をますます深く確信するに至ったのだ。

三月三十日結成された単一青医連は、従来の世代別を打破し、個人加盟制で既に三百名を突破し、高圧タンクの爆発を白い巨塔の解体に向けて、その巨大な影を病院内に投げかけている。整形外科、分院内科をはじめ数医局において医師連合の準備会ができて活動し始めている。

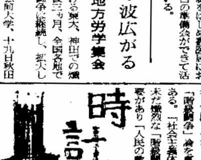
連帯の波広がる
東北地方労学集会

一月における東大、神田での熾烈な闘いの後三ヵ月、全国各地で東大・日大闘争は継続し、拡大している。

四月十八日弘前大学、十九日秋田大学において、公安、大学当局、民青、右翼の敵対をはねのけて勝ちとった「東大・日大闘争勝利、労・農・学・市民連帯集会」は五百名の固い闘いの決意を結集した。東大・日大の全共闘、助手共闘、教員共闘のキャラバン隊は、集会で あるいはバリケード内討論会で、東北地方に燃え上る闘いの炎の中に新たなる闘いの力強い連帯を勝ち取っている。

東大五百名決起
4.20 四・二八への大突破口

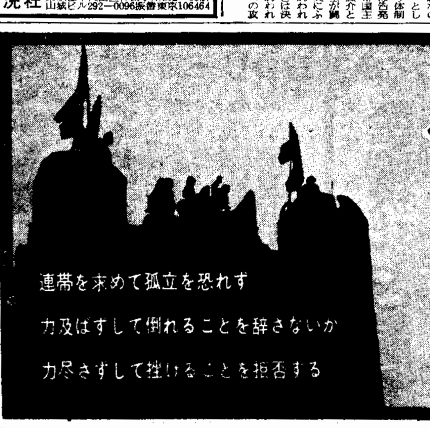
四月二十日、来るべき七〇年安保闘争の六九年における発火点四・二八安保・沖縄闘争に向けて、全国の青年労働者、学生一万二千が明治公園に結集し外務省―国会議事堂へ向けて戦闘的なデモンストレーションを展開した。東京大学全学共闘会議も反戦・反安保を闘う学友五百を結集し四・二〇闘争の学生部隊の先頭を切って闘った。



岡山大学の構内で一人の警察官が死亡した。「死亡」した警官に、人間の故に、哀悼の意を表する。権力の手先「犬」としての死ゆえに、深く黙とうし、安眠を祈る」―「同大全共闘見解」―（朝日十八日付朝刊）▼われわれは「人民の敵」論の立場をとらない。自由法曹団の弁護士達は昨年"基本的人権"の擁護から「民主勢力」の擁護へと方針を転換している。「トロツキスト」学生は「民主勢力」に敵対する「人民の敵」であってその弁護活動をすることは同法曹団の方針に反するのである。ここに「人民の敵」論に基いた「弁護拒否」の思想があり、彼等は東大闘争の弁護活動を一貫して拒否し続けている▼「人民の敵」という考え方は、まさしくスターリンの「階級闘争」論を裏づけるものである。「社会主義体制」の下でも未だ熾烈な「階級闘争」をやる必要があり「人民の敵」を抹殺する必要があるとスターリンは考えた▼日共＝民青の暴力論もまたこのような論理に基いている。彼らはブルジョア国家の自衛権すら肯定して帝国主義の論理を先取しながら「政治」と「軍事」（＝暴力）を二元論的に分離し「軍事的中立は政治的中立を意味しない」とうそぶいて恥じない▼われわれにとっての暴力は思想表現そのものであり、政治と軍事は不可分・一体のものである。暴力は、技術に解消されてはならぬ。暴力は、われわれの実存そのものにかかわる問題なのだ▼一人の人間の死が「犬」としての死にしかならないという体制の構造そのものをわれわれは告発し、闘っているのである。帝国主義戦争においては、権力を媒介として、実はプロレタリア同士が闘っているのだという暗い事実にふまえなければならない。われわれは暴力の「正当防衛」などは決して主張しない。それはわれわれの暴力が権力体制そのものへの攻撃的暴力だからである。

変革のための総合誌
情況　1969年 5月号　¥200円 〒12
未来論と変革論……佐々木光
―進歩の拒絶反応―
幻想としての生―吉本隆明批判―……片岡啓治
連載　生活動論 ㊂……大久保そりあ
「ブルースを唄え」後、八年間の沈黙を破って書きあげた衝撃作
戯曲「ヴァカンス」……菅孝行
反乱は拡大する　情況臨時増刊号　¥380
情況社　東京都千代田区神田小川町2―10新山城ビル292―0096振替東京106464

高知聡著　都市と蜂起【最新刊】
パリ・コミューン・ハンガリア革命を生起的に遡及し、「国家と革命」論の現代的展開を試みた気鋭の評論集。新たに書下し二〇〇枚
【内容】未決のスターリン主義／真夜中の兵士／転向―〈現実の発見〉と〈革命の発見〉／都市と蜂起／生命と革命の持続と断片／永久革命の祭り／革命の発見／国家の死滅とユーゴスラヴィアの実践／宮殿と広場とバリケード／偽りの祠と偽りの十月　情況論（選挙・クーデタ・直接行動）他10篇収録
四六判・上製本・貼函入り・三五二頁　定価九五〇円
高知聡著　異貌の構図　四六判価八八〇円
スターリン批判、ハンガリア革命というそれぞれの転形期を内在的にとらえ思想文学論として刷出した第一評論。
日野啓三著　虚点の思想　四六判価七八〇円
【動乱を越えるもの】〈実在〉の自然の論理にそむこうとする精神の自己確認と黒い幻想を記したエッセイ一六篇。
永田書房　東京都目黒区鷹番3の6の1　振替（東京）97608番　電（712）2770



砦の上にわれらの世界を
―ドキュメント東大闘争―
東大全学共闘会議編
B6判650頁・表紙カラー
ビニール装・写真110枚
¥700.
輝やかしい戦闘の中間総括1500枚！
全国学園闘争を闘うすべての友へ
われわれはかく闘った………
〈本書の内容〉序　山本義隆　Ⅰ　医学部闘争　Ⅱ　闘争の全学化と新しい闘争主体の成立　Ⅲ　第一次収拾策動の展開とその大衆的粉砕　Ⅳ　闘争の深化と既成大学体制の根底的解体―付・文学部団交8日間の記録―　Ⅴ　全学封鎖の提起　Ⅵ　「紛争収拾共同化」との武装対決　Ⅶ　全国学生による武装バリケード闘争　Ⅷ　東大闘争は不滅である―東大闘争日誌―　資料・東京大学異聞
〈お近くの書店へ予約してください〉
[illegible]
亜紀書房

加藤近代化路線を打倒し帝国主義的教育秩序を葬り去れ

全闘連理論合宿よりの報告

十三日から三日間にわたって行われた全闘連理論合宿において、東大闘争中間総括および今後の方針と展望に関する報告と討論がかわされた。中間総括においてはわれわれの具体的・現実的政治過程の中でいかに闘いを持ち得るのかが問題とされ、当面、教育の帝国主義的再編と闘うのは、日常的実践過程の中でこそ貫徹されるべきであることが確認された。学生運動にみられるような日々の実践過程そのものが帝国主義的秩序に対する闘いとなり得るような"われわれの秩序"＝闘う"日常性"の創造がわれわれの課題である。われわれが沖縄・安保闘争と真に関わり得るのも、東大闘争＝全共闘運動を徹底的につきつめた地点からであることもまた確認されるのである。全闘連理論合宿の詳細は目下集約・検討中であるが、ここに理論編集部の手によりまとめた合宿報告の概略を掲載する。（編集部）

レポーター　理系大学院闘争委

Ⅰ、政治過程的総括

(1)七項目要求から全学封鎖へ　―「大学自治」幻想の破壊―

(2)改革者集団・日共＝民青

Ⅱ、組織運動論的総括

レポーター　教育系院生会議

一、六〇年代の大学政策の課題

二、教育の帝国主義的改編

三、当面の大学政策

レポーター　経済系大学院闘争委

一、世界帝国主義の危機（略）

二、日本帝国主義の展開

三、70年安保斗争論

医学連機関紙
全日本 医学生新聞
3月21日「医ゼミ」を僭称する民青ゼミは日共東大指令部、医本館で行われた。まさしくその時、分裂組織「医自連」の守護者、京都「民主」府政は府医大闘争圧殺を計り47人の学友を検挙。30～31日の医学連合宿は30校90名の結集で令状なしの公安の乱入をスクラムで阻止しながら勝ち取られた。東大闘争を切り開いた医学連は全国学友の先頭で闘うぞ！
61号
電話(433)1111内線2234　年12回　〒共 500円
港区愛宕町慈恵会医科大学自治会気付　医学連　振替東京39932

三一書房　東京神田駿河台2

果てしなき進撃
東大全共闘編
私たちの闘いは「否」の闘いである。自己の精神の内部世界における欺瞞と虚構の現実を含めて外部世界の既成的現実の孤立を恐れず過酷な生活の闘いの炎を解放闘争の日まで燃しつづけようとする東大全共闘の思想的原点
三一新書・290円

大学占拠の思想
秋田明大編
十万日大生の蜂起の理念はいま全国学園に継承され七〇年をめざす巨大なたたかいの一環となりつつある。＜叛逆のバリケード＞が生みだしたこの破壊と創造の論理、反大学の構想をあきらかにしつつ、明日の行動に定着させようとする日大全共闘の永久闘争宣言、羽仁五郎氏も絶讃推薦！
三一新書・320円

増補 叛逆のバリケード
日大闘争の記録
闘いのなかで生まれ変った新しい青春の姿　嵐の共感を呼ぶ自己変革のドキュメント！
増刷！日大文理闘委編／四六判・490円

全学連
中島誠編著／怒れる世代の思想と行動を内側から衝く話題のベストセラー！　重版！／三一新書・290円

女子学生
黒田寿男之他編著／女にとって大学とは何か。現場から諸問題を考察する／三一新書・290円

革命の思想とその実験
梅本克己／マルクス主義の原理を再把握しつつ激動する現代日本の政治的・思想的情況に透徹した眼を注ぐ問題提起の書　普及版好評／四六軽装420円

70年闘争の大衆的爆発に向って連帯と協同を呼びかける急進撃シリーズ

炎で描く変革の論理
東大全共闘　経済大学院闘争委員会著
今なお無期限スト続行中の経済大学院が永続する東大闘争の明日のために情念と行動を明確化した全面総括
＜本書の内容＞
・東大キャンパスの反逆
・解放講堂死守の意義
・共闘会議の論理と心情
・医学部全学闘の見解
・時計台占拠から無期限ストへ
・闘わざる民青の基本的性格
・体制否定から幻想打破へ
・権力機構としての教授会自治
・大衆団交と学生自治
・なぜゲバルトは行使されたか
・一般学生――その多様な存在
・変革の論理と保守の論理
・機動隊導入の内幕
・東大闘争の火は消えない
・闘争は幻想のヴェールをはぐ
・共闘会議の組織と問題点
・官憲の狂暴な弾圧の実態
・東大闘争略年表など二十章
三二〇円・送50円

歴史選択としての七〇年闘争
北小路敏著（元全学連委員長）
日本帝国主義の安全の道を設定する支配階級の野望に屈服するか・安保粉砕への労働者階級人民の決起をかちとり・日帝打倒の歴史的端緒を切りひらくか・道は二つに一つだ。
三五〇円　送50円

全学連は何を考えるか
秋山勝行著（前全学連委員長）
緊急増刷
七〇年闘争を支える全学連の論理的背景を語る原典的発言と行動的指標
二八〇円　送50円

書店売切の節は本社へ　東京都中央区京橋二の八　振替／東京一八九〇〇九
自由國民社

切拓いた地平はいずこに

東大斗争と反安保沖縄斗争
▽▽▽▽その位置と構造△△△
高　村　　誠

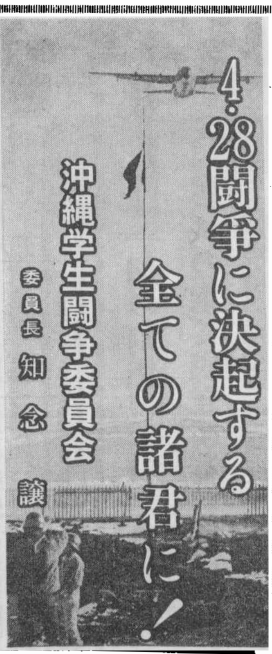
東大闘争は、或いは東大全共闘

70年安保を導くもの

日米安保体制の再編強化に占める沖縄の位置

東大斗争が切拓く闘いはどの様な構造をもつのか

4・28闘争に決起する全ての諸君に！
沖縄学生闘争委員会
委員長　知念　譲



四・二八をめぐる沖縄の情勢

「戦後」への反逆
二・四ストの裏切りの中で蓄積される沖縄県民の巨大な破壊力

改革の幻影を批判する
（八十島改革委員会）

「大学における学生の権利と役割」批判

「処分制度の改革」批判

（2は4面に続く）

救対報告

救援
支援
闘争主体

大学　大学
学大　学大

反逆への招待
（好評発売中）
—混屯からの発言—
☆日本近代の根拠☆知識人犯罪論
☆私的全共闘論
☆暴力論　＝未知の革命
☆たたかいの中の私、日和見への招待
☆戦闘的非戦闘的集団への憧憬
☆グラビア／学園闘争ゲバラ写真
＞新入生特集＜
☆大学へくる人へ☆主観主義的大学案内
＞筆者＜　高橋和巳・菅谷規矩雄一・野村修・岡本太郎・清岡卓行他
¥280円／送料40円Ａ５判160頁
京都大学出版会
京都市左京区吉田　京大構内

現代の理論　五月号　二五〇円
●特集●現代への挑戦—学園闘争その結果と展望
現代革命と学生〈叛乱〉の原理——沖浦和光
大学闘争と科学・文化技術論——北沢方邦・中岡哲郎・坂本賢三
大学革命の原理（下）——安藤紀典
教育大学改革の反動的拠点——村田恭雄・小寺山康雄・田島秀実
「大学革新闘争」の革新——森　雅史
「研究者の論理」と知識人——古川　純
現代史と学生運動——野間宏・小田実・真継伸彦
六八年度学生運動総括と七〇年への展望——森川　徹
東大闘争の運動論的総括——黒沢謙吾・富田　武
ブント・中核派の教育学園闘争論批判——国井　茂
「教育研究の自主的・民主的発展」論の構造——山村和夫

空前の 叛逆のバリケード をきずいた日大文理学部闘争委員会が闘いの中から送る理論機関誌

日本大学全学共闘会議
文理学部闘争委員会理論機関誌
創刊号
日大斗争
特集＝日大闘争・その政治的総括
Ａ５判　102ページ　活版９ポ３段組　頒価 150円

日本大学全学共闘会議文理学部闘争委員会
理論機関誌「日大斗争」別冊シリーズ第１号
戦後教育反動の嵐に抗して
—中教審答申中間報告にあたって—
Ａ５判　50ページ　９ポ２段組　頒価 150円

文理戦線
第５号 ¥20
69年闘争の総括

法廷闘争は一切の幻想払拭の上で成立する

検察の論理

「早大事件」と一括されるものは、検察官が、六ケ月の闘争の中から抽出し起訴した次の事実である。

建造物侵入罪、威力業務妨害罪（いずれも二月十日、二十一日の本部封鎖に関するもの）傷害罪、暴力行為等処罰に関する法律違反（三月三〇日商学部四月ストのためのバリ構築、四月十七日教育学部スト破壊阻止に関するもの）都公安条例違反（学外分離試験阻止に関するもの）の五件であった。

起訴、立法（後述）論告に一貫した論理は、行為の形式的違法性の枠内で徹底して刑事訴追を行ない、実は行為をささえる思想を階級的敵対物として粉砕することであった。三月七日の判決に対し直ちに検察側が控訴した事実は、彼等にとって公判が早大闘争に対する一対一対応の報復でにぶく、全国学園闘争への見せしめの断罪、更に学園闘争の未来的な可能性に対する全的な弾圧を目的としていることを物語っている。

裁判所の位置

四十一年十月五日、予定されていた公判開始にあたり、地裁当局は結集した三百名の傍聴者を「暴徒化する恐れがある」とし、多数の機動隊を導入し、庁舎内外を「警備」させることによって「厳正中立」のヴェールは地裁自身によって剥がされていった。三権分立・司法権の独立といい、社会秩序を守る等の名目であたかも人民の利害を守る第三者・中立の装いを凝らしたとしても、裁判所、法の本質は国家機構の重要な一環として人民の頭上に君臨し支配することにある。「国家や社会の価値原理、存在基盤にたてつく」階級的な闘いに対しては、最も悪質な「暴力」を行使する府であり、階級的秩序を死守すべき任務を帯びて存在するのが裁判なのである。

法廷闘争の推移と総括課題の提起

前号で明らかにしたように、私達の法廷闘争の課題と任務は

① 闘争の「復権」及び総括の深化、普遍化の推進
② 「法と秩序」の拒否、公判の不当性、階級性の暴露
③ なかんづく新たな早大闘争の理論構築を実現していくことにあった

次に法廷闘争の推移に即しつつ、総括課題を自己批判的に提起していくことにする。二年半五十四回にわたる公判の過程を便宜的に四期を分け、検討したい。

第一期―四十一年十月から翌年四月まで

この期の闘いの特色は早大闘争終焉後の反動と頽廃（阿部総長を中心とする新執行部は弾圧イデオロギーを早稲田ナショナリズム、大学共同体論の鼓吹、「権力」との対話に求め、広汎な学生の六ヵ月の闘いを悪夢と化した）に抗する闘いとして、一定の大衆的叛起に支えられ、被告人冒頭陳述、弁護人冒頭陳述が展開されたことにある。

この時期の闘争において、総括せねばならない問題は二点である。

第一点は、被告団と弁護団の矛盾の顕現である。ブルジョワ法を拒否し、その超克を目指す被告と基本的には被告の思想・行動を認めつつも、現行法体系の中で弁護活動せざるをえない法律家としての弁護士との間に揺れる矛盾は止揚でき得ない問題なのであろうか。第二点は一貫して法廷闘争を支配した「幻想」である。

法廷闘争は「一切の幻想を払拭した次元にのみ成立する」と述べた。だが、我々は真に幻想を払拭しえたであろうか。「法と秩序」を拒否することとは、「権力」との対話でしかないこと、つまり法廷は弾劾の対象でしかないことの主体的な確認であった。

第二期―四十二年五月から四十三年六月まで

この時期は、検察側立証に当てられ、起訴状が被告の有罪を"物質化"していく段階であった。立証の中心は早大当局者の証言であった。先ず大学はその基本的立場を「大学は当然社会の生産性向上に貢献すべきであり、産学協同体制は当然である」とし資本の要請に応える、「社会の中の大学」におく。次いで学費値上げに関しては「大学の経営上（経営の論理）必要不可欠な措置」であり「学生職員は関与すべきではない」とし、従って「法学部教授会の値上げ再考要請声明なども無視したこと」であったとし、更に第二学館の管理運営権については「大学の資産であり、教育施設であるから、館内の品位を保持し、利用の公正かつ円滑を期するために必要な基礎的な秩序を確保する」ため「当然大学が管理運営権を行使する」とのべ、学館を「厚生補導」の場として有効に利用していく決意を明らかにした。

第三期―四十三年七月から十二月まで

この時期の闘いは、被告、弁護団側反証に当てられた。私達は、この期を二つの面から総括せねばならない。

（イ）政治的情況の変化と法廷闘争の質的転換がもたらした歴史的破綻に対する現実的対応の欠落について―

（ロ）組織的な救対、支援活動の崩壊について―である。

早大以降の学園闘争と街頭政治闘争、（羽田・佐世保等の闘い）は日大、東大を先頭とする全国学園闘争を階級社会の推進する大学改編の深部へ迫る地平へ押し上げ、支配階級を震撼せしめ一定の恐怖を与え始めた。かくして全学スト封鎖を焦点とする早大公判は権力によって闘争全体への見せしめの裁判―学園闘争が創り出していくであろう未来的可能性への予防弾圧と―して目的意識的に転換させられつつあった。

他方、闘争敗北から二年という時間的経過は、救対活動を組織的な活動から個人的請負いへと後退させ、公判をして「早大闘争の亡霊」の活動と呼ばしめていった組織的救対活動崩壊の因は法廷闘争を媒介とする早大学友と被告の討論の断絶、現実的な闘争再建の失敗に求められる。これは早大全学共闘会議の限界を余す所なく、残酷に露呈させた問題として総括されねばならない。

第四期―去る一月十八日の論告求刑を契機に判決に至る二カ月半

法廷闘争は最終意見陳述、最終弁論の展開、判決公判強行に集中され、それは総括と新たな展望を鮮明とすべき期であった。被告団は最終意見陳述の中で、二年半の法廷闘争を総括し、国家権力によって強制される暴力的社会規範たる法、およびその論理を弾劾し、「いかなる判決を下しても無駄な試みである」ことを思いしらせることを宣言した。また弁護団は学生スト、抗議、学生自治の当然の権利を主張し、「学生の闘争中、仮に検察側のいう行為があったにしても、当時の大学の不誠実な対応からみれば、学生の行為を罰することは、超法規的に処断することで到底許されない」と弁論を締めくくった。

三月七日、全国学園闘争との関連で、更に四月早大闘争を控え、重要な今日的意義を有した判決公判が開かれた。この日、デモ隊列で突入し、開廷を要求した私達に対し、地裁は、機動隊を待機させ"傍聴券"発行の手続きに固執し、傍聴者の入廷権を不当に制限し、開廷を大幅に遅れさせた。三時間後に入廷した寺尾裁判長は「この公判は世間の注目を集めているため、警備を慎重にした」と釈明しその後、十三名の学生に、有罪の判決を言い渡した。かくして、二年半、五十四開廷を費したブルジョア・セレモニーとしての一審公判は一応の終りをとげたのである。

（文責　長沢）

気紛れは免罪符にならぬ

田村（紛争の記録編集著作者）氏の覚書を批判する

高橋　忠雄

「東大紛争の記録」（これをわれわれは敵対物として批判して止まないが）の編集著作者、田村紀雄氏（東大新聞研助手）は、この記録の出版（一月十六日）以後約三カ月を経過し、大いに東大闘争への理解を深められたようである。そしてその理解深化の結果として「破廉恥な犯罪者にさえ、傷つき倒れたものには、何らかの救済をするヒューマニズムを私たちは持ち合わせているではないか」（同氏の東大闘争についての覚書＝二、一九六九年四月十五日より）とて、一月十八日、十九日の大弾圧に傾れた学友に対する"暖かい援助"を決意されたようである。われわれ東大闘争全学共闘会議は、この氏の決意に対して、心からなる御礼を申し上げると同時に、厚かましくも、その援助の多からんことを乞い願うものである。ここに氏の心からなる誠意を受け止めるわれわれとして、氏の行為にいくばくかでも報いるため氏が「研究所内討議資料」と銘打って、出された上記の「覚書」＝②について若干の批判と助言を試みるとしよう。

氏は同覚書において「批判点は多岐にわたっているが、ここでは編者（編集著作者）の東大闘争への立場は如何という疑問にしぼって考え」（同覚書）てみることにしたという。

この疑問に対して氏は、まず①『紛争の記録』を出版するにあたり「"なんとなくいつも一緒"といった仲よしグループ的なムード」（同覚書）に乗り「それぞれの立場を不鮮明にしたままでのユニオン・ショップ的な」（同覚書）「"助手会"のフィクションとしての"合意"に依拠し」（同覚書）たという。そして②「虚構でしかなかった"助手会"の合意の影に身をおいて一般的な発言をしていた」（同覚書）そうである。さらに③「東大闘争で多くの学生諸君が血を流し合っているその瞬間にさえ"研究"やアルバイトが続けていられる"研究者"に何度も疑惑の目を見はったが、自身も流血の"オフ"の日には疑念もなく"研究"を続けられた」（同覚書）という。

そしてそれぞれ①〜③にわたる彼の行動を①＝「ある行為を行なった私の責任は重い」（同覚書）②＝「主体性を確立する努力を弱化させるものであった」（同覚書）③＝「恥じねばならない」（同覚書）―と自己批判しておられる。

そして「ここで立場を明らかにしてものを言へ（ママ）と問い詰められたとき、階層やイデオロギーや役割を示すことでも何でもない」（同覚書）く「言うならば、"己は東大闘争（東京大学の誤り―著者）の告発者なのか、被告発者なのか"ということなのである。」（同覚書）とし、「助手という身分からくる権利の制限や大学の意思決定への間接性をあげて、被告発者は、学長や評議会、せめて教授会構成者だというのは言い逃れだろう。」（同覚書）と分析（？）したあと「"教官"として大学の管理運営機関に関与していることによって、東大の今日の"危機"を醸成した加害者意識へ自己を転化しない限り、いかなる自己変革も不可能であろう。」（同覚書）と結論している。

つまり、氏は東大闘争の過程のなかで「"助手会"」という「虚構」に依拠して「一般的な発言を」「流血の"オフ"の日には疑念もなく"研究"を、「主体性を確立する努力を」怠ったと"深く""恥じ入り"」、このうえで改めて、自分は東京大学のなかの被告発者であり「東大の今日の"危機"を醸成した加害者」であったと自覚され、主体性を確立された模様である。

そして「こうした加害者意識の欠除が大学の退廃でなくてなんであろうか。この退廃こそ、東大闘争がえぐり出そうとしている告発すべき病根ではなかったのか」（同覚書）と「大学の"実験室"的状況」（同覚書）のなかで彼が発見したと錯覚している"真理"を鼻高々と自画自讃されるに及んで、氏はこの退廃からのがれ、晴れて自由の身になられたようである。

さて、小鳥のように自由な田村氏はどこに行かれるのだろうか。同覚書によれば『紛争の記録』が「東大闘争へのダメージの効果を与えたという批判に率直に耳を貸す必要があると考え」（同覚書）て「全共闘の鋭い問題提起」（同覚書）に敬意を表しつつ「この、『記録』を編者が研究者として否定し乗り越える」（同覚書）けわしい道を登りしながら楽しいピクニックに出かけられたようだ。

なぜ楽しいピクニックかといえば、氏の志向される「研究者」なる存在は、氏が属しておられる東京大学新聞研究所の進歩的文化人の大立物といわれる某教授が全く同研究所に姿さえも見せず、所内の対処すべき問題から逃避しつづけながら（いや主観的には、暖かい寝床の中で日夜さぞお苦しみのことだろう）、自宅研修なる国家公務員法の規定に守られてノーノーと月給ドロボウ（これ自体は我々は大賛成だが）をはたらき、かて加えて、総合雑誌なるものに「沖縄解放」だの「憲法は道具」だのと有難い御託宣をたれていられるようなけっこうな存在だからである。

ピクニックの話はともかく、当初の論点であった"立場"について氏の論理を見るに、氏が自覚されたところの立場とは"加害者"ということになるようだ。いうまでもなく、氏は、氏が自覚されると否とにかかわらず加害者そのものであったし、いまも、そうである。

しかして、氏は、いかに自己の加害者的立ち場を自覚されようと「私は、東大闘争は、その闘争過程で生まれた新しいコミュニケーション思想によって、これまでのものを否定するだろう。反マス・コミュニケーションの思想を用意するだろうと確信してはいた」（同覚書）などと、全共闘に、"オカマ"のごとく色目を使われようとみずから闘うことを選ばず、楽しいピクニックの道を行かれるかぎり、依然として、東大教官の万能（？）の権力を有する加害者、抑圧者であることに変りはない。そしてそのような田村氏は、我々の敵対者以外の何者でもないのである。

つまり、氏がいかに多額の金品を氏のヒューマニズムの名において全共闘運動にカンパされたとしても、それは著者のおごり、気まぐれ（『紛争の記録』を出版されたように）の域を出るものではなく、我々にとってカンパは、氏の意図とかかわりなく敵から奪った戦利品に他ならないのである。

氏が無自覚に行なった『東大紛争の記録』の出版は、我々に過及の好餌を与えた。加害者にとって無知は破滅への道である。浅薄なるヒューマニズムと称するものでこの無知があがないきれるほど甘くはないのだ。悪いことは言わぬ、聞いたふうな八万余人は今すぐ止めて自覚的加害者に徹し、正面から我々に敵対せよ。さもなくば、いさぎよくかかりをサラリと捨てて、氏の"内なる敵対者"へのあくなき闘いに身を投ぜよ。その時我々はるえる氏は、我々の頼もしい同志である。

読後即座に闘いを！

―座談会―

砦の上にわれらの世界を

――ドキュメント東大闘争

帝国大学のくびきの中から全共闘の闘いの雄たけび

昨年一月二十九日医学部無期スト突入以来一年有余にわたり、生命をかけた闘いを続けてきた東大闘争全学共闘会議編による"血"であがなった闘いの記録『砦の上に、われらの世界を！』―ドキュメント東大闘争―が、四月十日、発行された。これは、大学当局、右翼、民青、官憲一体の暴圧に抗して今日を闘い、痛苦な自己否定を通して明日の地平をかいま見る闘争主体が権力について大学について、学問について、学生、研究者としての自己の存在について、ビラ、タテカンを通して語った、東京大学における「荒廃の中から輝かしい攻撃的知性の復権をかち取ってゆく闘いのドキュメントである」（同書序文―山本義隆）・一月十八、十九日本郷・神田闘争の熾烈な闘いの直後から全存在を賭けて製作に取り組んできた編集委員のメンバーと、出版を受け持つ編集者が一同に会して行なった座談会を以下掲載する。

【出席者】
田中喜麿（亜紀書房）
山川一郎（社系博士課程）
吉田　靖（人文系博士課程）
水木　茂（工系博士課程）
吉本明子（教養学科）
下村康昭（教養学部[illegible]）
司会・編集部

血のにじむ営み語る

編集部　まず、東大闘争が「砦の上に我らの世界を！」を生みだす必然性、そしてそれが闘争の中でもっている重要性といったところから―

山川　十一・一二全学総決起集会で、全学バリケード封鎖貫徹の方針が大衆的に確認されて、東大闘争は個別改良闘争から大きく一歩を踏み出したわけだけれど、ここに至って、東大を構成するすべての人間が自分のいわば、"全存在"をかけた対決をせまられた。この対決の中、闘争主体が東大とは、学問とは―といったような本質的な問題を必死で自己に問いかえしながら一歩一歩進んでいかざるを得なくなったとき、我々のこの血のにじむようないとなみを語っていく必然性が生まれたんだと思う。そしてそのことを僕が田中氏に話したのが、この本ができるきっかけだった。

田中　私たちとしては、この闘争を通して、共闘会議が強烈な実力闘争をもって鋭く提起した問題を、どう本づくりの仕事にまとめていくか、私どもとしては、この闘いを分かりやすく解説しない―という原則を一つ考えたのです。全共闘の闘いは、闘争主体によってしか語り得ないし、それが大衆理解しにくくてもそれを全面的に出していく、そういう編集方針がそこから導かれる。つまり編集屋としての仕事を私どもは放棄する全面的に全共闘にたより、私どもの仕事はまったくの本づくりの手伝いに限定することによってしかコミットしない。そういうかたちでしか編集者がこの闘いに参加できないようなものが、東大の闘争にはあるのじゃないですか。

この話がはじまった十一月から闘争の急テンポな展開で、編集作業をやっていく時間などはとてもなくなってしまい、年が明けるまでのびのびになっていたわけですが、一月十八日、十九日以後、共闘会議に加えられた大弾圧の結果、莫大な救援金が必要になり、また、運動自身があの時点を境に大きな転換の岐路に立たされ、中間総括的なものの必要性が痛感されたこともあり、一月二十一日から助手共闘はじめ全闘連、青医連、駒場共闘の諸君たちにより、急速に編集作業が進んでいったわけです。

山川　十八、十九日以後、逮捕されずに残った我々に今、なにができるか―という非常につきつめた気持ちの中から出てきたのが、限られた状況のなかで、行動方針を提起する以上、それを具体化、現実化する責任が、ビラ、タテカンを出す過程そのものにある。こう考えた時、ビラ、タテカンは、単に記録なんていうものじゃなくて、闘争の現実そのものだということがありますね。

編集部　本づくりのいきさつはそれくらいにして、まず、「ビラをして語らせる」ということの本の表現形式の問題にはいりたいと思います。

立看に込める片想い

水木　それからタテカンについて言えば、工系の場合、かなり沢山しかもよく目立つものを出してきたわけです。タテカンというのは

下村　つまり、ビラというものは、なによりも闘争のサイクルの結果だということだと思いますね。つまり闘争をやり、必死の総括討論をふまえて明日へむけてビラを出して行く。一日一日の闘いの結果であり、あしたへむけての出発点でもあるわけです。もっともすべてがビラで語られるわけではないけれど―。

編集部　山本義隆代表は、この本の序文でこういうことをいっているんです。

「東大闘争のドキュメントを構成する全共闘や各闘争委員会の出した多くのビラやパンフレットは一枚一枚に長時間の議論が凝縮されている。「一日の闘争で疲れ切った体で、全員が納得ゆくまで議論し、後の方針を検討し、原稿を書いてカッティング（謄写印刷）レセッティング（原紙切り）してきたものである。だが何よりも、そこに書かれた他者への告発は自らへの告発であり、行動方針は、自らが実践するものとして提起されている」―と。

水木　僕たちは、ビラ、タテカン以外に、あまり手段がないわけですよね。だから特に積極的にそれを活用するっていうよりはむしろ、最大限使うしかなかったわけでしょう。

吉田　そう、ビラ、タテカンは単なる伝達の手段でもなければ、"一般的"アジテーションでもないわけで、それが実際に、一定の闘争そのものと、それを記録したものとは全然ちがってしまうんだな。

水木　それと、ビラなんか書いているとつくづく感じるんだけど、言葉が出た瞬間にもう裏切っているんだよ。これをいつもある程度意識しつつ、うしろめたさを持ちつつやっているわけなんだ。このことの認識をぬきにして、全く主体的な行為に裏打ちされずに記録なんかを読むと、どうでも取れるし、またかなり限界を持ってしか受け取られ得ないんじゃないかと思うんだよ。つまりある意味で読者の主体的力量みたいなものが試されちゃうってことね。逆に本当に闘っている奴は「反逆のバリケード」なんかで一行ぐらいで書き飛ばしてあるようなことだって、ズシッとくるということになるんだよ。

吉田　そして、無数に出されたビラやタテカンのうち、この本を作るとき、いったいその中からどれを選ぶか―ということだけど、それは結局我々編集にあたった者一人一人が自己と、東大闘争との緊張関係を物差しにして、ある時点時点で、闘争主体としてどうしても語らなければならなかったような言葉を一番良く表現しているものを選んで行くということになるわけだ。

山川　その点ははっきりさせておくべきだと思う。歴史叙述などというのは絶対に事実を越えることはできないんだ。全く別のものを作ることはできてもね。映画なんかでもね、たとえば「流血の記録砂川」ってのが闘争の記録としては割りに良いと思うけど、たとえ物すごい迫力があったとしても闘争そのものと、それを記録したものとは全然ちがってしまうんだな。

時期区分は闘争の画期をもって

編集部　ビラ、タテカンの問題はこのくらいにして、この本のもうひとつの大きな特徴である時期区分の問題について話を進めて行きたいと思います。

山川　時期区分については、あくまでも闘争主体によって作られたものだとの意味で東大全共闘運動にとって画期をなしたような闘争の日付を区切りに使ったわけです。これは、全共闘運動の歩みとか流れとかいったものをはっきりさせることによって中間総括しようということで議論を重ねていったわけです。

下村　編集におくれて参加したので時期区分についての討論を知らないんだけれど、一一・二二を区分点にしていないことなどちょっと疑問があるんですよ。

山川　その問題については、かなりはげしい討論があったわけですよ。つまり、評価の問題なんだけれど、一一・二二はカンパニアにすぎなかったが一一・二三の駒場デッチ上げ代議員大会粉砕行動は、いわゆるポツダム自治会の枠を突破して運動が進んでいくという意味で全共闘運動にとっての意味は非常に大きいということで、一一・二三を取ることになったと思います。僕自身としては、このほか、東大全共闘武装行動隊の確立の画期ということで一一・二三の意味を評価しているんです。もちろん、このような運動の深化に一一・二二が及ぼした影響は非常に大きいと思っているんだが。

下村　闘う主体の側からの区分ということでそうなったのなら、それはそれで良いと思うんですが逆に一一・二二において、全学バリケード封鎖決行か否かをめぐって対立したという点で、主体の側から、むしろ深く自己批判的に総括しなければならない日ではなかったか―と思っていたんです。おそらく京都の現在の状勢が、一一・二二当時の東大全共闘の場合と非常に似ていると思います。だから、もし京都で本をつくるとしたら三月二日は時期区分に入れないかも知れないわけだけれど。（笑い）

吉田　僕も一応、ノンセクト・ラディカルというか、「バリケード内少数派」なる立場の、この時期区分に賛成したわけだけれど、やはり、一一・二二を区分点からはずすことによって、一つは東大全共闘の全国学園闘争へのかかわり方の問題、そしてセクトの問題、この二つが、はっきりしないままに残ってくると思うんですよ。これについては、東大闘争自体としてもまだ、必ずしもスッキリしていないわけだけれどね。

吉本　それは、駒場の"内ゲバ"についても言えると思うんです。駒場共闘として、第八本館のなかでは、一応「東大闘争に敵対するものだ」という線を出したことは出したんですが。

山川　セクトの問題だけれども、東大闘争を語る場合、やはりセクトを先験的に中心に据えることはできないと思いますね。武装行動隊の問題にしてもいわゆるノンセクト部分のはたした役割りは非常に大きいし、しかも、全共闘の活動は、情宣にしても財政にしても、全闘連、助手共闘で一貫して担っているという実態にそったうえで、この本の編集が行なわれているということになると思うんです。

本の殘らぬ闘争を構築するぞ

編集部　最後に、今までの議論をまとめる意味で―

水木　いわば"生気"のぬけ落ちたカスでさえ、これだけあるんだから、本物はもっとすごいんだ。本物を君たちがやれ！っていうこと。

下村　今後の闘争のなかで、この本が残るようでは良くないと思うんですよ。なるべくこの本の存在が小さくなるような闘争を作って行くことですよ。

山川　一番のぞましいことは、この本が世に現われるやいなや猛然と売れて、アッという間にだれも忘れてしまう。そして読んだ人たちがみんな闘争をやっている―ということだな。

メモ
『砦の上にわれらの世界を』―ドキュメント東大闘争
序　山本義隆
第一章　医学部闘争（六月十五日まで）
第二章　闘争の全学化と新しい闘争主体の成立（九月二十七日まで）
第三章　第一次収拾策動の展開とその大衆的粉砕（十月十二日まで）
第四章　闘争の深化と既成大学体制の根底的動揺（十一月十二日まで）
付　文学部団交八日間の記録
第五章　全学封鎖の提起（十二月十三日まで）
第六章　「紛争収拾共同体」との武装対決（一月十二日まで）
第七章　全国労学による反権力武装バリケード闘争（一月二十一日まで）
第八章　東大闘争は不滅である
付　東大闘争日誌
資料　東京大学黒書
B6判　650頁　七百円
亜紀書房刊

（3面から続く）

2、闘争支援家族の会、結成へ

闘いを支援する種々の会が、現在、全国各地に、続々と生まれつつあるが、「東大闘争を支援する家族の会」が、去る三月三十日発足した。この会には地方から、遠くは宮城、鳥取から、上京した一〇〇余名の父兄が出席し、東大闘争弁護団および統一救対の報告をもとにして、恒常的に、連絡体制をとっていくことを、確認した。会としては、今後、即刻子弟の身柄釈放と早期統一公判を要求して署名活動を広める一方、来る五月二日、三日には東京、大阪で、第二回の会合をもち、更に全国各地に「家族の会」を設立するよう準備をすすめている。

月刊 毛沢東思想
5月号発売中　B5判　定価100円
五・四運動50周年記念特集
座談会 青年運動の方向
日米安保体制打破のために　小室　剛
プロレタリア国際主義にもとづく日中友好運動の発展のために　編集部
時事評論 矢は弦を離れた　大塚有章
大衆運動の抑圧者―労働貴族　鶴岡、衛
日修の出版労協私物化を暴露する　若山　肇
未組織労働者の組織化　沢村鉄雄
発行所　毛沢東思想社
東京都千代田区神田神保町1―27松屋ビル3階
TEL (291) 9491　振替東京 29295

東大斗争
―第2号―　350円〒別
統一公判闘争を闘い抜くために
一九六九年一・一八・一九東大神田闘争を更に発展させるために　今井　澄
拘置所の窓から（獄中書簡集）
東大闘争の原点　中上　隆輔
公判闘争の記録と資料
東大闘争証人の会事務局
東京都文京区本郷郵便局私書箱第46号
振替東京 19049

今年最大の日本人への贈物！ 東大内山秀夫助教授
◇強い実践の要求の下に生れ、しかも理論の根本から解明され、今日のあらゆる問題に光を投げ、将来の社会をきずくための手がかりを与える。あらゆる意味で新しい画期的な書！　武谷三男
◇これは読者の頭の中にしまいこむような古い学問ではなく、そこから行動が生まれてくるような新しい学問である。この本は民主政権えの解放の道を示している。　衆議院議員　井上　泉
羽仁五郎著
都市の論理
「坊っちゃん」以来の正義感！
今世紀最大のベストセラー！
◆読者のこえより
◇約半月かかって本書を熟読致しましたが、世界史を担当する高校教師として、生徒に何を教えるべきか、明確な指針を与えていただき著者に心底から感謝申上げております。近来にない快著と思います。（仙台市　A氏　51才　高校教師）
◇都市自治体の必須性が具体的に教えられる。この類の書物にありがちな理論の不明確さ、理論の閉鎖性が全くく、万人の書である。（浦和市　T氏　23才　建築・学生）
◇大学生になるにあたって、これを読むことによって、今日の大学民主化の理論的・歴史的事実をつかむことができ、社会の矛盾をひとつひとつ正していこうとする時役に立つと思う。若者の純粋な心には、社会の悪がまざまざと映る。もしオトナには映らぬとしても。（新潟県　K氏　19才　大学一年）
◇自治体は民主主義の学校といわれるが本書は正にその学校の教科書といえるだろう。その意味で、自治体住民の必読の書である。（武蔵野市　Y氏　43才　地方公務員）
◇私はベストセラーというもの（その真の価値）にあまり期待していない。しかし『都市の論理』はそういう私の食わず嫌いを自己批判する方向にもっていった。我々の今後の生き方、主体的な立場、そんなことを説いてくれたこの本は、私にとってちょっと頭の上らぬ教師のように見えてくる。革命の根本は我々の主体性の中に有るのだ！（東京都　M氏　24才　東京大学大学院）
◇勉強したくなる本。（東京都　H嬢　20才　会社員）
◇人生に目標ができた。（高松市　M氏　21才　会社員・商高）
◇「本書を置いてない本屋は本屋にあらず」と言いたくなるほどの内容だ。社会問題など全く興味のない、たんなる高校生だったが、この本は僕にとって"開眼の書"となった。（大洲市　M氏　17才　大洲高校）
◇当代最高峰の書。（福岡市　H氏　60才　団体役員・早大卒）
◇市民の・学生の・労働者の・女性のための都市学、はじめて確立！
◇自治体を無力にしているものはだれか？　独占資本の永久政権がいかに都市を破壊しているか！
◇警察機動隊が学生を襲う。独占価格の物価値上げが女性を襲う。公害が老人を襲う。暴走トラックが子どもたちを襲う。ジェット燃料タンク車が繁華街駅周辺をおびやかす。軍事条約体制が都市を包囲する。われらはなにをなすべきか！
◇保守永久政権の腐敗の進行を阻止する唯一の方法は野党第一党への投票集中による政権交代。都市は連合せよ。独占の国家は死滅する。
◇ここに都市の論理がある。独占の論理に対する都市の論理を諸君の手に！
勁草書房　東京神田駿河台2　B6判620頁　ペーパーバック版480円　上製本950円

絶賛発売中！
栗原達男のカメラ・アイは勇敢で、ひたむきだ（朝日ジャーナルより）
怒りを日々の糧に
学生闘争の記録・栗原達男写真報告
栗原達男・中島誠著　B5判五八〇円
六三年三里塚・王子野戦病院からはじまり日大・東大闘争を経て全国に拡がった学園闘争と反戦闘争を冷徹に捉えた写真報告。本書の各ページから聞こえてくる青春のうめきは、私たちの平穏な日常に突きささる！学生闘争がはらむ問題を自己の課題として変革を要求する現代を告発したドキュメンタリー・レポート！
東京都千代田区九段南2―4―14郵番102　冬樹社　電話 263―3421　振替東京7757

學藝書房　千代田区神田小川町3―2　TEL (291) 7161〜5
好評発売中！
反戦と変革　小田　実・鶴見俊輔編　B6判　三七〇頁／定価五八〇円
べ平連・京都国際会議の全容を網羅。反戦運動とは何か？　基地問題とは何か？　七〇年安保にいかに対処すべきか？　市民・学者・文化人の良心の発言は、世界に拡がる反戦と社会変革への市民運動の実体を伝える。
変革への提言―国家は私を教育できるか　家永三郎・日高六郎他　B6判　三七〇頁／定価四八〇円
家永教科書訴訟の本質は何か。権力は教育をどう歪め、何を企図しているか。その告発の証言の数々を収める。